

雪国にも春が来た！

雪国に春を告げる木の花と言えば、やはり、マンサクの花です。秋山郷暮らした十九年目の私も、今では、梅の花ではなく、マンサクの花を見て、雪国にも春が来た喜びを感じます。

今年、三月に入ってから、たびたび大雪が降りましたので、マンサクの花が咲き始めたのは、四月に入ってからのことでした。花の赤い中心部から、黄色くて細長い四枚の花びらが、巻かれたりボンがほどけていくような感じで開いていきます。二メートル以上もある残雪の中で春の訪れです。「春が来た！と言ふ喜びは、雪国で暮らした者にしかわからない」と言う言葉が、今は本当に、よく理解できます。

さて、このマンサクには、「シシハライ」という別の名があります。また、秋山郷では、カモシカのことを「シシ」、あるいは、「クラシシ」と呼びます。では、

このマンサクの枝を人間が持つて、実際にカモシカを追い払ったのでしょうか。私はそうではないと思います。冬の間、マンサクの枝は雪の中に閉じ込められています。ところが、春の暖かい日差しによって雪が解けてくると、その枝がパシツと音を立てて、突然立ち上がってきます。その付近で木の芽などを食べていたカモシカが、そんな状況に驚き、その場から追い払われます。こんな情景が「シシハライ」の名の由来ではないかと思っています。

さらに、マンサクの枝は、雪国になくはならないものです。秋山郷の猟師さんたちによると、春、熊取りに出かける時に履くツメカンジキの材料なのだそうです。ツメカンジキは、雪の上を沈まないように、すべらないようにという目的で履きます。これには、親指ほどの太さのマンサクの枝を茹でて曲げていくのですが、材料がしなやかであるため、作りやすく、しかも丈夫だそうです。木の特徴を細かく知り尽くし、それを上手に活かしてきた秋山郷の人たちの知恵を知り、私はとても豊かな気分になることができました。

④ マンサク マンサク科マンサク属 『日本の野生植物木本Ⅱ』平凡社発行より抜粋

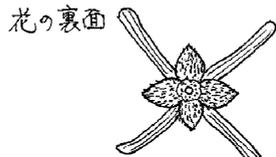
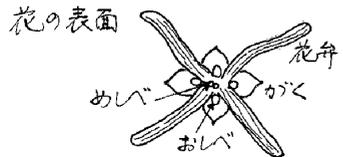
全国の山地に生える落葉性の木。

早春、葉の出る前に、黄色い花をつける。花は、葉の付け根に1つずつ、あるいは数個ずつ、わけてまわってつく。花弁は4枚あり、黄色くりボン状で、1cmほどである。かくも4枚で、かみはたまご形で反り返っているが、内側は暗紫色をしており、外側には毛が密生している。花の中には、短いおしべ4本と、2本の花柱をもっためしべがある。

実は丸く、外側には短い毛が密生している。熟すと、2つに裂け、黒光りしている種子をはじき飛ばす。

マンサクという名の意味は、「満作」のことで、豊作

と同じ意味である。この木が、枝いっぱい花を咲かせるので、このように言う。また、マンサクとは「ます咲く」のことで、この花が、ほかの花にさきかけて、早々と咲くことから出た名だとも言われている。



2002. 3. 26. 前倉

⑤ マルバマンサクは、葉が倒卵円形、先は円い。北海道西南部から本州の日本海側を鳥取県まで分布する。さつうは、花が黄色であるが、ときに紅色を帯びることがある。



❄️ 雪国の生活文化と縄文文化の伝統 - 雪上歩行具

『津南町史 資料編 下巻』津南町役場発行より抜粋

縮布(あみぬの=アングイン)と毛皮をまとい、足には何ををはいていたのであろうか。特に積雪地帯の場合には、この雪上歩行具が重要な問題である。日常生活でもそうであるが、特に冬の狩猟では生命にかかわる問題である。

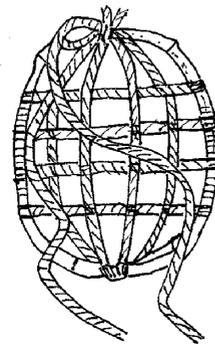
そして、すでに戦前において、縄文晩期の青森県八戸市は、遺跡からカンジキが出土しているが、従来ほとんど関心が払われていないのはどうしたことであろうか。しかも実物は、現在でも八戸市立歴史民俗資料館に保存されている

のである。杉山春榮氏は、「太き蔓を巻いたものを集合して芯となし、それに同一蔓状のものが幾重にも巻かれてある。……その形態はあたかも雪国に属するカンジキの外かきを失った如くにも見られる。」と、記している。丈夫な外かきに対し、弱った中側が、まるで切れた下駄の鼻緒のように捨てられたのであろう。

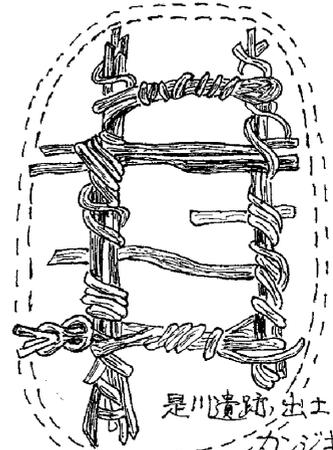
❄️ かんじき

『北越雪譜』鈴木救之著より抜粋

かんじきは古訓なり。里俗、かじきといふ。たて1尺2寸、3寸、よこ7寸5、6分、形圓のごとく、ジヤガウといふ、木の枝にて作る。鼻は及らして、クマイブという蔓又はカツラといふつるをも用ふる。山漆の肉付きの皮にて巻きかたむ。これは、前に圓したる襻の下にはくものなり。雪にふみこまざるためなり。



江戸時代の
カンジキ



是川遺跡出土
カンジキ状残欠

山菜の第一走者

雪国で、春一番に花をつける木がマンサクならば、草の花の一番はフキのとうです。

私が住んでいる秋山郷前倉は、四月下旬の今も、残雪のために、フキのとうすら、まだ本格的なシーズンを迎えていません。

それでも、雪解けが早い場所では、ぽつぽつと、フキのとうが姿を現し始めました。秋山郷では、フキのとうを「ホウキントウ」と言います。

私は、フキのとうは、春になって雪が解けた後、やがて、土の中から出てくるものだと、長い間、思っていました。それが間違いであることに気づいたのは、秋山郷に住むようになってからのことです。

ある年の秋の終わりの頃、秋山郷前倉の人が、枯れ葉に覆われた地面で何かを摘んでいました。それは、丸くて、小さくて、固い、秋山郷で、「フキツ玉」と

言っているものだったので。

秋のうちに、来年の春のフキのとうの準備がすでに出来ていたのです。

今年の春一番のフキのとうを、そおと、一つ摘んでみました。フキ特有の香りが、冷たい空気の中で静かに香りました。一年ぶりの懐かしい香りでした。

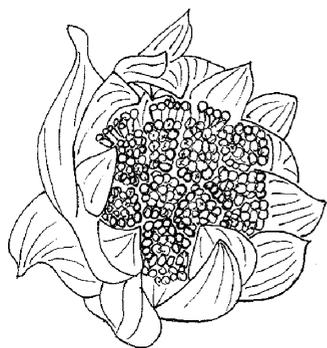
摘んでいると、皆同じように見えるフキのとうですが、よく見ると、雄株と雌株があることに気づきます。

雄株は、花が黄色っぽくて、とう全体がふくらとしていて、見るからにおいしそうです。秋山郷では、雄株のことを「アワ」と呼びます。

一方、雌株のほうは、花が白っぽくて、株もスマートであるため、余りおいしく見えません。雌株を、アワの雄株に対して、「コメ」と呼んでいます。

このフキのとうを第一走者として、秋山郷の山菜暦は、いよいよスタートします。

雪消えとともに、秋山郷の山々は、山菜のリレーで賑わい続けます。



フキのとう
2002. 4. 1. 前倉

雪どけのフキのとうに始まり、花ワサビ・コゴ
ミ・タラの芽・コシアブラ・キノメ・ウド・ギョウ
ジャニンニク・ミズナ・イラクサ・ゼンマイ・ワラ
ビ・モミジカサ・山竹の子・フキ・マタタビの実
などの山菜が続く。

フキ フキ科 フキ属
山地の路傍に生える多年草。
葉は、花の後に、地下茎の先に生え、腎円形で
幅15~30cmになる。葉柄は60cm以上にも
なる。(フキ)

花は4~5月に咲く。雄株と雌株があり、食用にする。(フキのとう)

ミツバアケビ アケビ科アケビ属
無毛で、つる性の木本。

ふつう、落葉性であるが、葉
小葉は3枚、卵形ないし広卵形
がある。

花期は4~5月、先の方に小型の
部に大型の雌花をつける。雄花
4~5mm、雌花は濃紫色で径15

ある。
液果は、長楕円形で、長さ約10cm、
色を帯び、裂開する。食用

※「キノメ」とは、ふつう、サ
地方では、ミツバアケビの新芽(=つる)
言う。このことは、いかにアケビの木が多く自生
し、親しんできたかという証明だと思われる。

また、ミツバアケビの花は、雌雄同株で小さく、
濃紫色の目立たない花である。しかし、その香りの良
さは新芽を摘むのを一時、忘れてしまうほどである。

は時には越冬する。
で、少しの波状鋸歯

雄花はつけ、茎
は濃紫色で、径
mm程度で

熱すと紫
にする。

シヨウの新芽をさすが、当
をキノメと



2002. 5. 21. 前倉

タラノキ ウコギ科タラノメ属

高さ2~5mの落葉低木。

若枝には、無数の細長いとげがある。

葉は互生して、枝先に集まってつき、一回羽状複葉で大きく、50~100cmに
なる。葉柄や葉軸にも、細長い鋭いとげがある。

若芽を「タラの芽」といい、食用とする。とげが少ないか、全くない品種を
「メダラ」という。

ウド ウコギ科タラノメ属

山野に生える多年草。大型で、茎は太く、短毛があり、高さ1~1.5mになる

若い柔かい茎は、風味のある春の山菜で、畑にも植栽されていて、「お虫活」、
または、「土当帰」と書く。

マタタビ マタタビ科マタタビ属

落葉性の蔓性。

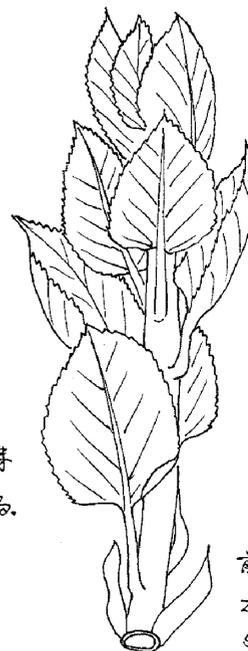
枝の上部につく葉は、表面全体、または、先のほうが白色になる。

果実は、辛味と特有の香りがあり、食用とする。

また、マタタビバエが産卵して、虫こぶとな
った果実は、漢方という「木天蓼」(くもくてん
りょう)で、身体を温める効用があり、鎮痛
剤となって、強壯、中風、疝気(せんき)など
に用いられる。この効用は、熟果でも同様で
ある。また、ネコ、および同属の動物が好
むことで知られている。

新芽は、てんぷらにしたり、ゆでて、あえも
のにして、食用とする。

マタタビの新芽 →
すき通るような新芽
全体に白い毛がある。



前倉
2002年
5月26日

『日本の野生植物』 木本工 平凡社発行